

寿々家は先代の宇太郎が4代目と聞いたことがあります、位牌の中には天保8年や嘉永6年に亡くなった女性の法名が書かれたものがあります。「天保の頃から旅籠をやっていた」と聞いたことがあります。

戸籍の上では、昭和16年に70歳で亡くなった鶴吉という人が昭和12年に隠居届けをして、養子の種次郎に家督を譲り、鶴吉亡き後、種次郎が鶴吉を襲名しています。

(筆者訂正：寿々家にあった「明治三十一年改 諸届諸綴」によると、初代鶴吉の死亡は明治35年7月で、翌36年に種次郎が鶴吉に改名している。改名以前から種次郎が鶴吉の名で営業に関する届出書を書いていることから、初代鶴吉から2代鶴吉(種次郎)が家督を継いだのは明治26年頃までさかのぼると推定される。したがってご当主のお話にある昭和16年に亡くなったのは2代目鶴吉で、隠居届の年代は昭和10年(下記)のことと思われる。)

2代目鶴吉は、昭和10年に隠居し、宇太郎(明治35年8月29日生)が家督相続しています。旅籠から料亭に改めたのは宇太郎の代から間違いありません。「素性のわからない人物が出入りして泊まっていくのは不安だ」という考えからだったとのこと。

宇太郎は、家督を受け継ぐ前のことと思われませんが、東京の芝という現在東京タワーのある辺りで料理人としての修行を積む傍ら、尺八を習い始めて料理以上に熱中したようです。

...

屋号は旅籠の頃は鈴屋でしたが、料理業にしてから寿々家と改称しています。

宇太郎は、昭和42年頃「今まで15年ごとに家を建ててきた」と言っていました。その最後が新館と称している南側の建物(昭和32年)で、その前に建てたのは地藏小路を隔てて東隣にある木造三階建の家です。それは弟政三(明治40年6月17日生まれ)のために建てたものでした。本館がその15年前ということでしょう。3階の舞台に描かれている一筆書きの富士山と鷹と松の図は制作の過程を節子が見ていたそうですから、終戦前後の作品と思われます。

寿々家の最盛期は新館を建てる前後の5年位でなかったかと思います。宇太郎の母ひさが昭和26年に亡くなる頃までの寿々家は経理が杜撰で、調理場に吊り下げられている籠の中の売上金を家人から使用人まで勝手に持ち出せる状態だったそうで、ひさの隠し金だけで終戦前なら家が新築できるほどの額だったとか。それが新円切り替えで紙屑化していました。

商売屋育ちの節子が実権を握るようになって、寿々家は隆盛期を迎えました。江戸前仕込みの宇太郎の料理が評判を呼ぶと共に客扱いの巧みな節子の接待が多く、常連客を獲得しました。

しかし、宇太郎自身は料理を振舞うことよりも尺八への関心が異常に高く、多くの弟子に謝礼も受け取らず、料理まで無償提供したり、名古屋・東京から師匠を招いて大演奏会を開いたりするなど、かなり散在をして節子を悩ませていたそうです。

新館の棟上げをする日には名古屋の NHK に出演演奏するとして、娘初美を伴って出掛けてしまい、本館から飯盛山が見えなくしないという節子の判断で、屋根の高さを予定より低く建てたとのこと。

昭和 30 年代後半になり、自家用車が普及し、飲酒運転が厳しく取り締まれるようになり、商売がしづらくなっていきました。

宇太郎は 82 歳で胆石症を発症するまで料理業を続けましたが、最後の 10 年は馴染み客の予約注文のみを受けていました。

...

宇太郎は廃業 3 年半の昭和 62 年、85 歳で亡くなり、妻 節子は独り住まいを続け、平成 14 年に 87 歳で亡くなりました。